開成町のいまむかし<10>

この町に住んで100年目の方も、100日目の方も、皆さんで確かめる開成町の「いま」と「むかし」。このコーナーでは、12回にわたり、文化財保護委員とともに町のいまむかしをたどります。

問 教育総務課 ☎82－5221

酒匂川の松並木

新春を祝い、今回は酒匂川の松のお話です。

昭和19年夏、学童疎開列車から松田駅に降り立った筆者が初めて目にしたのは、青々とした田んぼ、そして清流酒匂川と土手の大きな松並木でした。その時の風景は今も心の底に深く刻まれています。

かつては暴れ川で氾濫を繰り返していた酒匂川も、田中丘隅や蓑笠之助などの働きにより堅固な堤防が築かれ、沿岸の住民もその上に松を植え洪水に備えました。二宮金次郎も２００本の松を植えたと言われています。歌川廣重の浮世絵「東海道名所之内　酒匂川」にも川の土手に松並木や蛇籠が描かれています。

しかし、太平洋戦争の末期には主に航空機の燃料としての松根油をとるために多くの古松が切り倒され、時には落雷の被害や松くい虫による枯死などで年々その数を減らしていきました。現在、大口土手から小田原の河口までに植えられている松の本数は、両岸合わせて１０５８本です。

神奈川県では松枯れ対策として、マツノザイセンチュウに有効な薬剤の樹幹注入を行って松の保存に努め、年末には松の幹にわらのこもが巻かれます。松のこも巻きは、足柄の里の冬の風物詩となっています。

東海道の宿場にあった松並木も、今では国道1号線の大磯や小田原市酒匂にその一部を残すだけとなりました。いくつもの時代の荒波を乗り越えてきた酒匂川の松並木は、足柄の里の宝物です。

文化財保護委員会　遠藤　将光

こもが巻かれた土手の松
（写真提供：遠藤商事）

生き生きレポート

問 酒田保育園 ☎82-2277

今年1年生になります！

酒田保育園　小澤　千佳

酒田保育園と酒田みずのべ保育園の年長児は、1年を通して「二園交流会」を行っています。今回の交流会は酒田保育園で実施し、共同制作や、園庭でのリレーを楽しみました。

春・夏・秋と交流を重ねてきたお友達とも、少しずつ距離が縮まり、4月から入学する小学校の話もしながら仲を深めています。

「またきてね！」「みずのべにもきてね！」と手を振りながら、1月の「お別れ親子遠足」での雪遊びや、各小学校へおでかけする「幼稚園・保育園・小学校交流会」での再会を約束していました。

4月には、いよいよ1年生です。健やかな成長を祈っています。

図書室だより〈1月〉

町民センター３階

【開室時間】火～金曜日　10：00～20：30
土・日曜日　10：00～17：00
9日(月)は祝日のためポストは使えません
【休 室 日】毎週月曜日　年末年始休室　H28.12/28～H29.1/4
※休室期間中は返却ポストは使えません　※貸出冊数は4冊まで、期限は2週間です

今月のこの１冊

落語小説集 芝浜　山本一力 著

古典落語の演目である「芝浜」をはじめとする人情噺五題を直木賞作家、山本一力が小説化した。

「芝浜」の主人公である勝治郎は鮮魚の担ぎ売りを生業にするが酒好きで怠け者。女房のおしのに説得されて半年ぶりに仕入れに出ると、大金の入った財布を拾う。これで借金は帳消しになり、働かずにすむと考えるが、翌朝目を覚ますと財布は消えていた。おしのは夢に違いないと言うが金なしでは借金が返せない。勝治郎は改心し働く事を決意する。

新しく購入した図書（主なもの）

● 一 般 書 ●

- みやこさわぎ　西條奈加
- 脇坂副署長の長い一日　真保裕一
- 木もれ日を縫う　谷瑞恵
- 君はレフティ　額賀澪
- 恋のゴンドラ　東野圭吾
- 夜行　森見登美彦
- 慈雨　柚月裕子

● 児 童 書 ●

- されどオオカミ　きむらゆういち
- はじめてのオーケストラ　佐渡裕
- 十一月のマーブル　戸森しるこ
- ひかり生まれるところ　まはら三桃
- グレッグのダメ日記 いちかばちか、やるしかないね！　ジェフ・キニー

みんな集まれ！子どもの広場・おはなし会

◇子どもの広場
- 内　容　「にわとりのからくり貯金箱」を作ります
- 日　時　1月21日(土)　10:00～
- 持ち物　はさみ・カラーペン
- 対　象　5歳～（未就学児は保護者同伴）
- 場　所　町民センター2階 小会議室A
- 申込み　直接図書室へ　☎ 82-5221

◇おはなし会（第２土曜日、第3水曜日）
- 日　時　1月14日(土)　13:00～
  1月18日(水)　15:00～
- 場　所　町民センター３階 図書室
- 申込み　申込みはいりません

毎月1日は、【開成ファミリー読書デー】家族みんなで本を読もう!

●家庭・地域・学校などでの読書活動を推進するため、開成町では毎月１日を「開成ファミリー読書デー」にしています。

＊文　芸

短　歌　ともしび短歌会

十一月詠

「ちら！ちら！」と部屋のどこかで鳴きゐたる
姿見えねどしばし楽しみぬ　府川ハツエ

“声はすれども、姿は見えず”の具現化例。作者は、本歌での鳴き声を聞きつつも、姿を確認できないまま、思い巡らし、しばらく楽しき入ったという。室内でのミステリアスな体験を掘出した歌。

久々の燃ゆる朝焼けと青空を
見入る寒さに今日は晴れるめり　杉本シズ子

朝焼けは俗に雨の前兆とされるが、久しぶりの朝焼けと青空を見上げつつ寒さを感じた作者は、今日は晴れるようだと確信した。長年の経験による自然への認識度の高さが、この歌を産み出した。

彼岸花のもゆる姿に我が身をば
重ね映しての思ひは深き　伊藤かよ子

彼岸花を介し、終着に作者の深層心理を想像させる歌。作者の具体の体験の様子と思いは、本歌から読めない。それが却ってこの歌を意味深長にしている。また、下の句の表現も艶があって好い。

近藤　正臣　選

俳　句　開成俳句会

十二月吟

隧道は山の腹なり山眠る　遠藤マツエ

春は山笑う、夏は山滴る、秋は山粧う、今月の山眠るは冬の季語。落葉を被る黒山は将に山が眠っている様を例えての表現です。隧道には山を貫通して出来ている訳ですが、冬の山は眠りに入った。その山は隧道を我が子のように抱き締めている。そんな作者の深く深い思いが読み手に伝わって来るのである。

新井たか志　選評

借景に富士の加わる冬の景　波多野すみ枝
山晴れて森しんしんと冬景色　濱本　主雄
年の瀬や土蔵に読く鳴る時計　足立ふみえ
里山の木々読くなり冬景色　有賀　孝子
薪暖炉の番人ゆずらぬ頑固婆　奥津ちわき
絵手紙の手慣れた筆や柿の晴　下澤　操子
北欧の巨大温泉冬景色　瀬戸　悦子
落葉降る昔むかしの石畳　遠藤まつ子
湯豆腐やあれこれそれの会話して　遠藤シヅ子
窓拭きは夫のこだわり年の暮　遠藤美津子
酒樽の箍の緩みや年迫る　遠藤　選者吟